

話せばわかる、何事も

ライアン・ケニー

幼い頃から、カンザスの人々、カンザスの文化、
カンザスの考え方に囲まれて育。た私は、自分の
世界が非常に狭いものであるということがなんと
なく分か、ていました。そんな私が留学を目指し
て日本語の勉強を始めたのは、自分の世界を広げ
るためです。

去年、念願かな、て、日本に留学することがで
きました。名古屋からバスで京都に観光旅行に行
きました。自由時間に、友達数人と飲みに出かけ
た時のことです。名前は覚えていませんが、とこ
もお洒落な店でした。ドアを開けると中には客さ
んが一人しかいません。ところが、私達が入ろう
としたとたん、店員さんが寄、てきました。

「ジャ パニーズ オンリー！ ジャ パニーズ オンリ
ー！」

生まれて初めて入店拒否を体験した私達は、戸
惑いました。「日本語が話せますよ…」と言、て
も、そのまま追い出されてしま、たのです。最終

的に、外国人が経営しているバーを見つけて、京都限定のビールを楽しむことができましたが、私は、その夜、人種差別が実際に存在する問題であることに気付かされたのです。

私が住むカンザスの単一的な環境は日本と似ていると思います。カンザスでは、見た目も考え方も似ている人が多く、その結果、人種差別のような問題を解決したいという気持ちがあっても、周りの人と違う意見を持つことに抵抗を感じ、そのため、問題を解決するのに必要な話し合いができない雰囲気になり、何も変わらない状態です。

去年、大学で人種差別に関する事件が起きました。女性二人が顔を黒く塗って自撮り写真を撮り、スナップチャットで友達グループに送りました。この差別的な行動は強い非難を受けました。二人ともバイト先からクビにされ、既に中退していたにも関わらず大学からは追放処分を受けました。確かに、二人の行動は冗談では済まされないものだと思いますが、ここまでの反応は必要だ、たのしかったですか。

私の友達に犯罪学を専攻している男性がいます。犯罪学の授業でよく人種差別の問題が取り上げられるそうですが、絶対に、自分の意見を言わないと言っていました。なぜなら、今、アメリカでは相手や少数民族などの感情を傷つけないようにしなくてはならないという風潮が強く、それにすぐおない意見を言い出すと、どんな目に合うかわからないというのです。

皮肉なことに、この友は少数民族です。少数民族の人が少数民族への差別問題に意見があるとしたら、私たちは耳を傾けるべきではないでしょうか。差別を受けたこともないクラスメートや先生などを怒らせるのが怖くて、少数民族が自分の意見を言えない今の風潮に、どうしてな、てしまっただけでしょうか。

この状態を変えるには、まず、人種差別を受けている人達の気持ちをわかったとする努力をしなければならぬと思います。自分の思い込みだけで行動するのはただの自己満足です。

私は日本で「外国人」になる経験をしたおかげ

で、少数民族の気持ちに気が付かされました。京都でバーを探していた数時間はどんな人生経験より、と勉強になりました。

しかし、留学の機会がなくとも、できることはたくさんあります。意見が違う友達をつくること。他人の意見をよく聞くこと。そして、あらゆる人は偏見を持っていてのものだということを認めること。いくら努力しても100%客観的に世界を見ることは出来ないと思います。自分は偏見に汚れているかもしれないという意識を持つ。これれば、他人の意見がもう少しわかるようになると思います。

皆さん、私達が平和に共存するには、コミュニケーションが非常に大切です。絶対話してはいけないことがあるとしたら、私たちは自由に生きることが出来ません。だから、もと遠慮なく話したり聞いたりできる社会を作、っていくことが不可欠だと思うのです。それが、最初の一歩になるはずです。